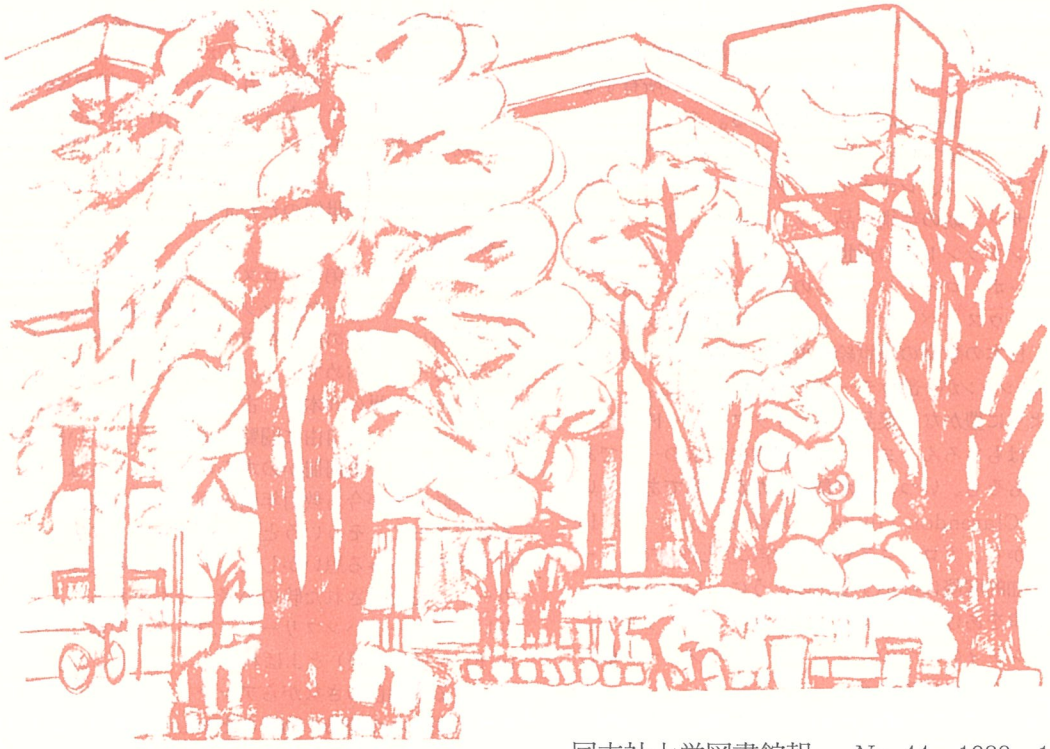
びぶりおてか



同志社大学図書館報　No. 44　1988. 10. 1

知の殿堂—ボドリアン図書館—

法学部長　西田　毅

欧米の古い伝統ある大学には、数百年かけて蓄積された有形無形の豊かな知的財産がある。厖大な刊本やマニュスクリプト、文書をはじめ、さまざまなコレクションを収蔵する図書館や博物館、文書館（アーカイブズ）、さらに由緒ある教会や劇場、コンサートホールといった文化的蓄積が大学で学ぶ者はもちろんのこと、大学が存在する地域全体の発展にも大きく貢献してきた。学都とよばれるイギリスのオクスブリッジなどその典型であろう。

私が外国の大学図書館がもつこのような文化的機能に関心を抱くようになったのは、何といっても1975年から77年にかけて、オクスフォード大学で在外研究の機会を与えられたことが機縁になっている。オクスフォードについて書かれた内外の文献はおびただしいが、ここでは、私自身の直接の見聞を基にした大学やカレッジの図書館事情の一端を記してみたい。

机の上に、筆者のイギリス滞在中、ほぼ同時に出版された二冊の本がある。一冊はオクスフォード大学ボドリアン図書館監修のA.G. and Dr.W.O. Hassall,Treasures from The Bodleian Library,Gordon Fraser,London 1976 で、もう一冊はDavid Piper,Treasures of Oxford,Paddington Press Ltd.,1977である。前者は、ボドリアン図書館に収蔵されている九世紀初頭の福音書（Macregol, c.800AD）から16世紀前半、メキシコで作製された古写本Codex Mendozaまで、抜粋された中世ヨーロッパや中米の古写本、稿本類36点の原寸大の色刷豪華本である。大学図書館のDepartment

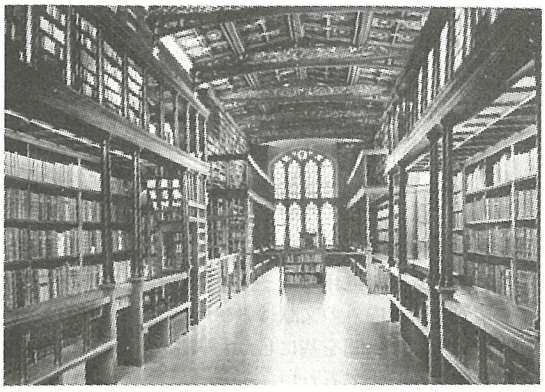
目　次

知の殿堂
— ボドリアン図書館 —……1
デューイの哲学と逸話……3
発注システムの概要……5
図書館学に関する
二次文献(下)……7
実例を中心とした
資料のさがし方(34)……9
ピックアップ
— 徳冨兄弟とトルストイ訪問 —…12

of Western Manuscripts が中心になって編集された。後者は、大学附属のアシュモリアン博物館所蔵の逸品を中心に、クライスト・チャーチ等各コレッジが所有する名画、彫刻、陶芸品等が収められている。そこには、BC2800年ころの古代エジプト王ファラオの石灰岩の像やミケルアンジェロ、レオナルド・ダ・ビンチ、ラファエロらルネサンス期の芸術作品、ファン・ダイク、ルーベンス、レンブラントらの近世画家、ターナー、コンスタブル、ゴッホ、ロートレックらの近代絵画から名器ストラディバリウス（バイオリン）、さらに中国唐明時代の陶芸品、日本の歌麿の浮世絵や根付など東洋美術の大規模なコレクションが一部カラー刷で収録されている。

このように豊かな蒐集品をもつオクスフォード大学は、イギリスはもちろん、ヨーロッパ最古の大学の一つであるが、そもそも、いつ、誰が創設したか不明であるという（The Clarendon Guide to Oxford, pp 2 − 3 ,1977）。しかし、ボローニアやパリ大学に少し遅れて、ヨーロッパの知的興隆に呼応するかのように、13世紀初頭に誕生の産声をあげたのである。マートン、ベイリオル、ユニバーシティの三つのコレッジがオクスフォード最古のコレッジといわれている。

大学は過去 750年の間に幾度かの浮沈を経て今日に到ったが、その間、途絶えることなく着実に集積された知の豊庫── そのかなりの分量は篤志家の寄贈品である ──が、オクスフォードを訪れる者を圧倒するのである。しかし、今、ここにあげた二冊の本はそのようなうっそうたる叢林のごく一部の紹介にすぎない。



大学の有形のストックといえば、まず、中央図書館としての位置を占めるボドリアン図書館があげられるが、それは、16世紀の有力な後援者で、マートンのフェローでもあったトマス・ボドリー卿の名にちなんで名付けられた。この図書館は大英博物館、ケンブリッジ大学図書館と並ぶ英国の三大版権所有図書館で、国内で発行されるすべての図書の寄贈をうける。現在、 300万冊を越す蔵書、五万点のマニュスクリプト、１万５千点以上の憲章、各種の貴重コレクションがあり、それら文献の収蔵場所、方法、検索システムは大規模で複雑な仕組をなしているという（Jan Morris,Oxford,pp149-151）。ボドリアン図書館は、旧館Old Library、新館New Library、ラドクリフ・カメラRadcliff Cameraの三館から成っており、旧館は14世紀に建てられた古い建物である。旧館の二階に上るとデュークハンフリーライブラリーとよばれる15世紀のたたずまいを今にそのまま伝える部屋がある。

ヘンリー五世の弟でグロスター侯とよばれ、大学の有力なパトロンであったハンフリー公の名前が付けられたその場所は、現在の広壮なボドリアン図書館の原点ともいうべき一画を占めている。そこには、多くのマニュスクリプトや中世の刊本が、古色蒼然とした開架式の書棚に並べられていて自由に閲覧できる。私は太い鎖で書架に固定されている何冊かの本をみたが、それは、かつての盗難防止策が今も数百年前と同じ方法で踏襲されている姿であって、そういうところにもオクスフォードの伝統文化の形をみる思いがした。「形」といえば、「読者カード」を交付された時の小景を今も忘れることができない。デュークハンフリーライブラリーの横にあるArts End(写真参照）とよばれるところ、そこの、天井まで達する茶褐色のさながらアンティークのような木製の本棚に囲まれた薄暗く物音ひとつしない静まりかえった空間で、黒いガウンを着た年配のライブラリアンと一対一でテーブルに向いあって「宣誓式」をおこなった。利用者として、遵守すべき規則を厳かに口誦するのである。残念ながら私はカードを失ってしまったが、たしか、一度交付されると有効期間は無期限であるとかれから告げられたように思う。

ボドリアン図書館の他にも10万冊の蔵書を誇るクライスト・チャーチをはじめ多数のコレッジの図書館があり、その数は大学全体で50を越すという。あるとき、私が所属していたセント・アントニーズコレッジの副学長で、著名な日本研究家のR・ストリー教授の案内で、ストリーさんの出身校のマートンコレッジの図書館を見た。15世紀に細工されたレリーフがある入口を入ると四万冊以上の蔵書が14世紀の創建当時と変らぬ風情の中に収まっていた。近くにはThe Queen's Roomsという名のホールがある。そこは、エリザベス一世をはじめ英国史を彩る王侯貴族が訪れた場所だという。オクスフォード大学は30余のコレッジからなる自治的連合体であり、それぞれ創設の歴史も経営方針も研究分野も異なるコレッジの独自性が強い体制にあって、大学全体の蔵書の管理や情報処理が今、どのように運営されているのか私にはわからない。旧館一階の総合レファレンスの部屋には大部のカタログが設置されていたが、資料管理の前近代性は私の滞在当時から一部で指摘されていた。しかし、あの中世の僧院を思わせるオクスフォードの図書館には、モダンなコンピュータシステムを駆使した情報処理や検索システムが、何か不似合な感じがしてならないのである。

デューイの哲学と逸話

森　章博

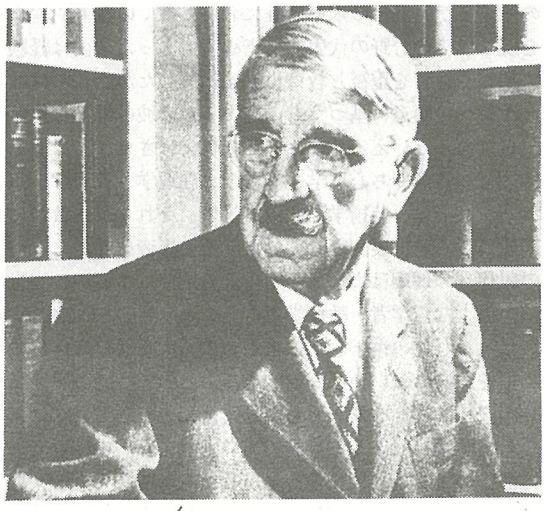
ジョン・デューイ（John Dewey 1859.10.20－1952.6.1）はアメリカの哲学者・教育学者として有名で、その92才7ケ月22日の永い生涯において多くの著書や論文を残し、その分野の代表的な指導者であった。彼は経験に基づく教育を重視し教育哲学を構想したが、これは社会改善への熱意に基づくものであった。彼の哲学は自然主義であるといえる。また、その哲学はさまざまな面を持っている。即ち心理学、倫理学、論理学、教育学、宗教学、社会学、芸術学、政治学等で、それらが皆教育に関連づけられて展開されていた。その影響は大きく、彼の思想への理解は肯定・否定千差万別ではあるが、20世紀の偉大な哲学者・教育学者として高く評価されている。彼は、これ迄の哲学観特に絶対観の否定を通じて自分の哲学を形成し、いわば「知的道具」として行動を導くための思想的設計を果たすものと考えた。そして哲学は人間の諸問題に対処する機能的道具と考えた。この考え方は在来の哲学説には見られなかったもので、デューイ独自の意図・理由が存在しており、それらをこそ彼の著述から学び取らなければならない。彼は、自己の哲学をプラグマティズムの成果として道具主義、実験主義と呼ぶことが多く、また自然的人間主義、経験的自然主義、自然的経験主義等と呼んだが、このことは彼の哲学の多面性を物語るものといえる。従来の哲学者とは異なった道筋を歩んだ彼は、前述の各領域での自然主義者、経験主義者として活動した。今日、教育と哲学との領域に限って考えてみると、彼は、哲学は教育の一般理論であるという信念であり、諸経験の統一や調和を求めるための期待としてとらえたといえる。彼の考えには、経験と自然との両者には不可分、連続性を根底とする思想があり、教育は自然と人間に対する知的、情的傾向の形成過程と位置づけるものであった。さらに、教育は哲学説を具体化し、その真価を検査する実験室であるともいった。従って、哲学や教育の改造は、社会の理想や方法の改造と提携する連続（Continuity）と連帯（Solidarity）が必要と考えた。種々の対立するものを統一する可能性は、この連続、連帯の操作によるものとした。デューイは、ヘーゲル哲学の中にこの考え方を見出したものと思われる。超自然的なものを否定した彼は「成長それ自体が、唯一の道徳的『目的』である」という言葉を述べたが、この「成長」こそ彼の思想を理解しうる重要な一つのキーワードである。

さて、デューイは、アメリカで「進歩主義教育協会」が設立された1919（大正8）年の2月9日に夫人と共に来日し、約2ケ月滞在し中国に行った。25日より毎週火・金曜日に東京帝国大学法科第35番教室で8回にわたる連続公開講義をすることが来日の目的であり、3月21日に終了した。この講義の一部は「哲学雑誌」（大正8年6月　34巻　388号）に紹介された。この講義は、“Reconstruction in Philosophy”に集録出版された。2年後の1921（大正10）年に中島力造の子息の慎一によって邦訳され『哲学の改造』（岩波書店）として出版、再版を含め2500冊程販売された。上述の「成長」の言葉はこの書物にある。デューイ夫妻は、4月9日東京より名古屋、奈良、伊勢を経て14日京都に来て、約1週間滞在した。4月18日と21日の両日に京都帝国大学法学部第7教室で講演がなされた。同志社女学校には、水崎基一の案内で4月16日来訪し夫妻は昼食を取ったのである。デューイ夫妻が同志社を訪問したことは記念されるべきであろう。詳しい状況について残された記録はないが、「同志社女学校期報」（大正8年11月20日　第44号）によると、この2回のデューイの講演は安易なものではなかったということ、同志社の英文科3年生は聴講が許されたこと、22日には、課外講演として神学部長の蘆田教授による「ディウイー氏のプラグマテズム学説」が行なわれたことが記載されている。デューイ夫妻の訪問を記念する署名などの『芳名録』がないのは惜しまれる。その夫人アリス・チイプマンは　1927（昭和2）年死去した。彼女はデューイ思想の形成に協力し、教育と社会問題で協同研究を果たしたのであるが、ここに逸話として特に紹介したいことがある。

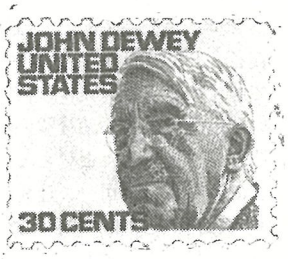
デューイが1905年7月にイタリアに行った折、夫人の希望でサビノ（Sabino）という少年を養子としたことである。このデューイ家の人間的愛情は、その後1946（昭和21）年12月デューイの後妻となったロバータ・ローウイツ・グラント夫人にも引き継がれた。そして、第二次世界大戦後の欧州の子ども達の非常な苦しい生活状況に同情した夫妻は、戦争孤児となったベルギーの男

の子（名前をジョンJohnとつけた）とその姉アドリエンヌ（Adrienne）の２人を養子として迎え入れ教育したのであった。前頁の写真のデューイ家族はデューイ夫妻とその２人であり、デューイの死の３週間前の1952年５月10日に撮影したものである。デューイ夫妻の暖かい心意気は、感銘深い。この夫人も1964（昭和39）年10月６日に同志社を訪問しているが、記名帳などに署名がないのは、すでに故人であるので残念である。

この度、ジョン・デューイが晩年過ごしたフロリダのキー・ウエストの別荘で書いた、1945年５月17日付の署名入自筆書簡（３頁）を同志社大学が入手した。そして大学図書館の「デューイ文庫」に収録された。デューイ文庫は、同志社で長年にわたりデューイ研究者であった名誉教授吉川哲太郎先生の発意と基金に依って1970（昭和45）年設立されたもので、図書館と文学部文化学科教育学専攻が文庫の選書その他について協議することとなり、運営は順調に行なわれている。同文庫には現在、洋書　177冊、和書　75冊があり、洋書の中には南イリノイ大学から出版の「デューイ著作集」とデューイの原書26冊が含まれている。現在までデューイの邦訳書は80冊出版されているが前述の和書の中には明治30年代以前のものは含まれていない。同志社大学にこのような理由でデューイ研究のための文庫が設けられたが、我が国では、1968（昭和43）年10月に創設された玉川大学の「デューイ教育学研究室」以来のことである。この研究室はデューイ研究の先駆者永野芳夫によって収集されたデューイ文献を遺族が寄贈したことによって設けられたと聞いている。同志社大学の「デューイ文庫」にデューイ自筆の書簡を収録したのは始めてである。デューイは手紙をよく書き、タイプよりも筆によるものが多いと伝えられている。アメリカの各大学や研究所は彼の書簡・原稿などの収集に務めている。南イリノイ大学の「デューイ研究センター」や、シカゴ大学、コロンビア大学はいう迄もなく、個人による収集についても目録化が進んでいるのが現況である。デューイは手紙の写を取らなかった。手紙には公的、私的なものがあり、常に相手を予想する対話であるが、彼は手紙を自分の考えの独白に役立てていたのではなかろうか。これは今後の研究によらなければならない。デューイの筆蹟は、誤字や脱字の多かったタイプのものよりも明瞭であったという門弟もいるが、私は真筆のものをみる限りそのようには考えたくない。デューイの独特の書体で書かれたものは、極めて判読し難いものが多い。この度の書簡の宛名もTack　氏あてと読み込んでみなければならないもので、確実にではなく、多分そうだろうと推定するものである。この書簡の内容は、哲学・論理的なものであるが、私信であるので紹介を控えて、ここではデューイの署名だけを次の写真の下方に載せておいた。なお、この写真は、彼が90才の1949（昭和24）年のもので、元気で進歩主義教育の指導者として過ごしていた時代のものである。南イリノイ大学の「デューイ研究センター」を数年前に訪問したが、デューイ書簡、原稿並びに著作物、録音テープなど總ての収集と活用に積極的に取り込んでいたことを憶い出す。



掲示したデューイの肖像の30セント切手は、実物は薄紫色で、1968（昭和43）年に彼の生誕110周年を記念して彼の栄誉をたたえるためアメリカで発行されたものである。私はこの切手のことについては知らなかったのだが、1975（昭和50）年５月に　オーテス・ケーリ先生から、消印のあるものを頂いたことで知った。これは、数年前にアメリカに留学した際入手した１枚である。ケーリ先生の知らせがなければ知らないままに過ごしていたかも知れない。



今年は、デューイの主要著書である『論理学－探究の理論－』と『経験と教育』出版50周年に当っているし、来年は、デューイ生誕 130周年とデューイ来日の70周年に当る。『論理学－探究の理論－』でも詳しく展開しているが、不確実な状況を確実な状況に変えること、即ち「疑い」から出発して確定した状況に対する「信念」（belief）に到達する「探究」を通じて、彼の哲学の本質を理解すると共に、私達一人一人の生き方と関連づけながら研究する道を歩んでいきたいと思う。

（文学部教授）

発注システムの概要

(1)発注システム（和書）の特徴

1987年7月よりテスト・ランに入り、改良を計りながら翌年3月より本格的稼動を始めた発注システムは、田辺と今出川校地にある2つの図書館で購入する資料の「収集」と「発注」、それに継続して購入している資料の「継続管理」とを日販マークを利用して今出川図書館で一元的に対応できるようにしたものである。しかも、田辺図書館では、装備を外注していることに併せ、資料検索を機械化しているため、装備して納品される「資料」とローカル・データを入力して、田辺図書館に納められる「田辺マーク」とが「発注した資料」と一致しているかどうかの検収が必要となる。同システムでは、この検収業務をも田辺図書館で機械的にチェック可能なものとしている。

また、発注入力作業の段階で、装備情報を入力することによって、「発注リスト」に目録や装備上の指示を合わせてできるものとしているが、この過程で重複購入のチェックも当然できるように設計されている。特に大きな特徴は、目録がとられるまでの間（田辺・今出川マークが作成されるまでの間）、発注ファイルを検索することによって、資料の「発注の有無」「発注日時」「納品日時」「取扱い書店」「マーク到着確認」等々も「書名」や「叢書名」のヨミ、それに「ISBN」などから、両館より容易に確認できるものとしたことである。

このシステムをもう少し発展させ、全学どこからでも発注ファイルを見られるようにすれば、各学部研究室・研究所との重複購入の調整にも、一定の役割を果たすことになると思われる。

新刊ファイルから「収書ファイル」への書誌データの取り込みや、「発注ファイル」への移し変え、さらには検索等々の作業は、オンラインのメニュー画面から作業を選択して行うものとなっている。これ等の仕事をたやすくするため「新刊リスト」「見計らい発注リスト」「発注リスト」「書店別継続図書発注リスト」等々のリスト類はすべてNPL番号や発注番号のバーコード付で打ち出し、「収書ファイル」「発注ファイル」などへのデータの取り込み作業は、バーコード読取方式を採用し、手入力作業の軽減を計るシステムとした。

さらに、田辺・今出川図書館を合わせて、延べ凡そ2000タイトルにも及ぶ継続図書（総取りする全集・叢書・シリーズ等）の叢書名、出版社名などのデータを、端末でのオフライン処理で「継続ファイル」として構築し、簡便に参照・追加・修正が行えるようにした。同ファイルをホスト計算機に電送し「日販（新刊）マーク」と毎週ヒットさせることによって容易に、しかもタイムリーに校地別、書店別に継続管理できるようなっている。

このシステムにより労力の軽減だけでなく、買い漏れを防ぐ意味で大きな改善となった。

(2)業務処理の概要

次に、各業務処理の概要について発注管理画面図を参考にして説明します。

＜日販新刊ファイルの処理＞

まず、日販より毎週納品される日販新刊ファイル（MT）を処理し累積ファイル（バックアップ用）を作成した後オフラインで構築した継続管理ファイルと新刊ファイルをマッチングさせ、冊子体の「書店別継続リスト」（NPL－No.バーコード付）と「日販新刊リスト」（NPL－No.バーコード付）を出力する。

なお、継続発注のパターンには次の4つがある。(1)今出川、田辺ともに継続扱い分(2)今出川のみ継続扱い分(3)田辺のみ継続扱い分(4)今出川、田辺ともにその都度決定するもの。継続扱いとなったものは、(1)以外を除き「日販新刊リスト」に校地別継続情報を記載し、書店別継続リストに掲載され自動的に収書書誌ファイルに入力される。

```
DLH000   ◆◆◆  同志社大学 図書館 発注管理システム ◆◆◆
＊＊＊  業務選択メニュー  ＊＊＊
        1．選書
        2．見計発注ＮＰＬ－ＮＯ入力
        3．継続発注ＮＰＬ－ＮＯ入力
        4．収書書誌データ削除
        5．納品図書  検収
        6．ＮＰＬ－ＮＯアンマッチデータ  削除

            該当する番号を入力して下さい。          [  ]
                                          終了＝ＰＦ１１
```

＜見計らいリスト作成＞

以上の作業により作成された、冊子体の「日販新刊リスト」より、見計らい発注をする図書を選択する。そのデータのバーコード（NPL－No.）を読み取り、「収書書誌ファイル」に入力し、「見計らい発注リスト」（NPL－No.バーコード付）を作成する。各書店はこのリストに従い見計らい図書を納品する。また、各々の納品図書には、このリストをそれぞれ切り離し、図書に添付する。

収書書誌ファイルは、発注システム完成以前の書店持ち込み見計らい図書をファイル化したもので、それまでの書店による一方的な持ち込み方式から、図書館が主体的に管理する方式に変更されたことを意味する。これに

より、従来の持ち込み漏れによる購入漏れ、および見計らい発注時点においての重複を防止出来るようになった。また、購入漏れを防止することは、単に資料の漏れを防止するだけではなく「日本全国書誌週刊版」および「出版社カタログ」による重複調査業務の簡素化が可能となった。（日販不扱いの図書については、従来通りカタログ調査、書店持ち込み等によって見計らい購入している。）

＜選書＞

収集・納品された見計らい図書を、図書選択委員会において選書し、見計らい図書の購入・返本を決定する。購入決定されたものについては、以下の処理を行なう。今出川・田辺図書館別に購入決定したものについて、図書に添付されている「見計らい発注リスト」のバーコードを読み、画面に表示された書誌データを確認後、一冊単位で書店・配架場所等の発注管理情報（複本の場合は、管理情報を繰り返す）を発注ファイルに入力する。日販マークのない図書（日販不扱いの図書、若しくはマーク化の遅い書店より出版される図書）は日販マークのデータがないので購入決定時点で簡略書誌を手入力する。

また、返本となった図書については、収書書誌データの削除作業（見計らい図書返品処理）を行う。図書に添付されているバーコードを読み取り画面に表示された書誌データを確認の上、収書書誌ファイルより該当データを削除する。

```
DL0202   ◆◆◆  同志社大学  発注管理システム  ◆◆◆

＊＊＊＊  収書書誌  削除  ＊＊＊＊

                                NPL-NO    [ 881258900 ]

書誌情報
  書名        [ 瀬戸大橋全記録                          ]
  巻数        [            ]
  著者        [ 山陽新聞社編                  ]
  出版社      [ 山陽新聞社          ]
  双書名      [                                         ]
  双書 NO     [            ]    ISBN    [ 4881972626 ]
  書名 ヨミ   [ セト  オオハシ  ゼンキロク               ]
  双書名 ヨミ [                                         ]
  金額        [ １３５００円 ]   NDC     [ ５１５       ]
管理情報
  処理日      [ 880715 ]
  今出川 継続種別   [ ３ ]        書店    [ M1 ]    丸善
  田辺  継続種別    [ ３ ]        書店    [ M1 ]    丸善


  該当データを削除するならばＰＦ２を押し下げて下さい
```

＜発注ファイルの修正・削除・検索＞

以上の処理をして入力した、発注ファイルについて修正・削除・検索作業を行なうことがでる。

(A)修正：書誌データその他の情報の修正を行う。

(B)削除：発注データ（書誌・発注管理データの両方）の削除を行う。

(C)検索：発注データの検索を行う。また同時に修正・削除も行える。検索は、「発注No.」「NPL－No.」「ISBN 」「書名読み」「双書名読み」で行う。

```
DL0201-C ◆◆◆  同志社大学  発注管理システム  ◆◆◆    （選書）

  ＊＊＊＊  検索キー選択  ＊＊＊＊

    1．発注ＮＯによる検索

    2．ＮＰＬ－ＮＯによる検索

    3．ＩＳＢＮによる検索

    4．書名 ヨミ による検索

    5．双書名 ヨミ による検索

    9．検索終了

                該当の番号を入力して下さい          [   ]
```

```
DL0201-B ◆◆◆  同志社大学  発注管理システム  ◆◆◆    （選書）

発注 NO    [ 870313002 ]          NPL-NO    [ 873273700 ]
書誌情報
  書名        [ キリスト教教育の現代的展開                ]
  巻数        [            ]
  著者        [ ジャック・L．シーモア編        ]
  出版社      [ 新教出版社          ]
  双書名      [                                           ]
  双書 NO     [            ]    ISBN      [            ]
  書名 ヨミ   [ キリストキョウ  キョウイク  ノ  ゲンダイ ]
  双書名 ヨミ [                                           ]
  金額        [ ２２００円  ]    NDC       [ ３７１．６   ]
  書誌番号    [ 00048440 ]       図書番号  [ 8800001649 ]
  MARC 納入   区分  [ １ ]       日付      [ 880606 ]
管理情報
  発注日      [ 880201 ]         図書番号  [ 8800001649 ]
  資料形式    [ １ ]             発注事由  [ １ ]
  校地区分    [ ３ ]             配架場所  [ １ ]
  書店        [ K1 ]   紀伊國屋書店
  図書 納入   区分  [ １ ]       日付      [ 880527 ]
  伝票        [ ３ ]             事故処理  [ １ ]
  ＰＦ９  ：書誌逐次検索  ＰＦ１０：管理情報逐次検索  ＰＦ１１：検索終了
  ＰＦ１  ：修正処理      ＰＦ２  ：削除処理
```

＜納品図書の検収＞

今出川図書館では、発注ファイルの入力時点ですでに図書が納品されているので、検収作業は田辺図書館のみでの処理となる。

発注ファイルに入力されたデータより発注リスト（発注No.バーコード付き）を２部作成し、各書店に発注する。発注を受けた各書店は、リストの指示に従い図書を確保し、「発注リスト(装備情報付)」１部を添付して、装備会社に回す。書店は装備をおえた図書にリストを切り離し添付して図書館に納品することになる。

さて、田辺図書館では、この様にして納品された図書の図書番号を発注ファイルに入力し、田辺マークが納品された段階での検収にそなえる。

田辺図書館では、装備図書が納品されてから約１ケ月後に田辺マークが納品される。この段階で、「発注ファイルにあるデータ」と「図書」と「田辺マーク」の３点についての検収が完了することになる。すなわち発注と図書納品の段階で、NPL－No.と図書No.が確定され、マーク納品段階で、そのNPL－No.と図書No.が検証されることになる。

図書館学に関する二次文献（下）

＜読書（前号からの続き）＞

104.“読書指導をめぐる30の素朴な質問 ―回答” 芦谷清『学校図書館』№107 1959年9月 P.52-54 (㊫P017；G3）所収

最後の30問目で関係文献を紹介してほしい、という質問に答えたもので、読書指導について書かれたものに解説を加えながら、約20点の文献をとりあげている。

105.“読書指導関係参考文献” 『読書指導事典：指導編』阪本一郎、滑川道夫、深川恒喜編 平凡社 1961 P.437-450 (㊫029.2；S2－2、V.1）所収

1945～1960年までの関係の主要図書を列挙している。邦文図書は著者名の50音順で約140点、欧文図書は著者名のアルファベット順で約120点のリストである。

106.“読書指導・利用指導関係文献あんない― 初めて係になる人のために― ” 山崎哲男『学校図書館』№389 1983年3月 P.52-54 (㊫P017；G3）所収

12点の関係図書に解説を加えながら紹介している。

107.“図書館・読書指導関係参考文献” 鈴木英二『図書館学演習資料・前編』全国学校図書館協議会編・刊 1985 P.318-337 (㊫010.78；Z－2b；V.1）所収

1948年～1982年に刊行された 450点の関係図書を14項目に分類し、著者の50音順に列挙している。

〔最新文献の探索〕

108.“最近の書誌図書関係文献” 深井人詩『日本古書通信』 1967年5月～ (㊫㊫P023；N、田辺Vol.51 №1 1986年～所蔵）所収

天野敬太郎氏の連載を1967年5月 153号より引き次ぎ、最近は毎月連載している。単行本と雑誌論文。

109.“文献紹介” 『ドクメンテーション研究』日本ドキュメンテーション協会 (㊫㊫P014；D）所収

1959年より毎月雑誌論文の文献紹介が開始されているが、当館では1964年からの所蔵である。配列は国際十進分類法（UDC）による。この文献で入手困難なものは、協会の事務局で複写サービス（B4・60円）もしてくれる。各論文右肩の文献番号を知らせればよい。

110.“書誌索引案内” 深井人詩『書誌索引展望』1977～ (㊫P020.1；S18）所収

1977年の創刊号より前年に発表された主要な書誌索引を本誌1年分（6回）に分載して紹介している。各書誌索引の主題語をゴシック体の見出しにして50音順で配列している。従来の書誌記述と異なり、書名、誌名を先行させているのは、図書館等での文献調査をしやすく便利にするためである。

111.“文献展望” 深井人詩『図書館学会年報』 1970～ (㊫P010.1；T3）所収

1970年より前年分の図書雑誌文献を“本邦図書館学界の展望1969、1970”として掲載、翌年からは“文献展望”として毎号に、項目別に分献を解説しながら紹介している。

112.“情報・ドキュメンテーションの国内文献集” 1976～ 『情報管理』 1979～ (㊫㊫P014；J）所収

1979年6月（V.22 №3，4）に“情報・ドキュメンテーションに関する国内文献総索引－1976・1977・1978－”として雑誌文献を目録にしている。次年度からは年1回、前年の分を“情報・ドキュメンテーションの国内文献集”として掲載している。著者の50音順。

113.“出版関係文献資料” 『出版ニュース』 1954～ (㊫P020.1；S17）所収

1954年から月1回（中旬号）、掲載している。一般書誌を含む国内の雑誌 100誌以上に載った図書館・出版・読書関係の記事を収録している。これの1年分の累積版が、本二次文献（上）20.で既出の「出版年鑑」の“出版（図書）・図書館関係雑誌記事索引”である。

114.『雑誌記事索引』人文・社会編 国立国会図書館編・刊 1948～ (㊫㊥P027；Z3,Z3－2)

我が国の代表的な雑誌記事索引誌である。現在の採録誌数は約 1,000種。3ケ月に1冊、年間4冊と著者索引が別冊として1冊出ている。タイムラグは平均4～6ケ月近い遅れがある。各記事の配列は目次の分類表により、分類項目中の配列は50音順としている。シリーズU学術文化の中の図書館、ドキュメンテーション、博物館、読書、図書・雑誌、ジャーナリズム等を見るとよい。

115.『雑誌記事索引』科学・技術編 国立国会図書館 紀伊国屋書店 1950～ (㊫㊥P027；Z2）

前出114.とほぼ同じだが、著者索引については1974年まではなく1975年から別冊、1982年から巻末となる。

〔新聞記事〕

116.『図書館関係新聞記事索引』― 1957.1～1972.12 新聞にみる図書館16年― 東京都立中央図書館 1974 P.150 (㊫010.3；T)

1957～1972年の16年間の全国紙5紙（朝日、毎日、読売、日経、東京）の中央版に掲載された図書館関係の記事を図書館種別に8項目に大別、日付順に配列し収録している。人名索引、団体名索引を付す。これ以

降の分は東京都立中央図書館報の「ひびや」に1～2年のキュムレイトで補遺版“図書館関係新聞記事索引”が掲載されている。「ひびや」は現在製本中。

117.“図書館関係新聞記事一覧”『図書館法成立史資料』裏田武夫、小川剛編　日本図書館協会　1968　P.417-418（㊫323.986；U、田辺011.2；ト）所収

昭和22年10月13日から昭和25年5月13日までの関係新聞記事を45点、日付順に列挙している。巻末に戦後図書館史資料年表（1933～1950）が紹介されている。

118.“雑誌・新聞掲載の「雑誌」に関する記事”『日本雑誌総覧』出版年鑑編集部編　出版ニュース社　1970　P.285-298（㊫027.5；N；1970）所収

1965年12月～1969年12月に出た雑誌と、1966年1月～1969年12月の主要新聞に所載の“雑誌に関する文献および記事”を集めたユニークな索引である。

119.“新聞切抜帳”『図書館雑誌』1980～（㊫P010.1；T2、田辺Vol.80 №.4　1986年～所蔵）所収

1980年より月刊で掲載している。全国紙だけではなく全国各地の地方紙に掲載された記事も採録しているので収録点数も多く、各地の動向を知るのに便利である。累積版はない。

〔その他〕

120.『図書館雑誌総索引』創刊号～Vol.44 1907～1950　文部省編　日本図書館協会（㊫P010.1；T2－2）

121.『書研究総索引』Vol.1～16 1928～1943　間宮不二雄編　青年図書館員聯盟（㊫P010.1；T10－2）

上記「図書館雑誌」と「書研究」の総索引は、それだけで図書館学の重要な検索ツールとなり得る。

〔補遺〕

122.“参考文献”『蔵書構成と図書選択』（図書館員選書4）河井弘志ほか編　日本図書館協会　1983　P.283-287（㊫014.1；Z2、田辺014.1；ゾ）所収

約60点。

123.“図書館の機械化文献集”津田義臣『図書館のオートメーション』（NIPDOKシリーズ33）日本ドクメンテーション協会編・刊　1984　P.163-170（㊫013；T3）所収　27点。解説付。

124.“OA機器と図書館に関する文献展望　文献”緑川信之『現代の図書館』Vol.23 №.1　1985年3月　P.59-64（㊫P010.1；G）所収　65点。

125.“スタッフ・マニュアルに関する文献リスト”桂啓荘『スタッフ・マニュアルの作成と活用――専図協スタッフ・マニュアル研究小委員会報告書』（専門図書館協議会研究報告6）専門図書館協議会編・刊　1985　P.133-134、136-144（㊫018；S7）所収

欧文編は70余点、和文編は1960年12月～1984年12月までの110点あまりをリストアップしている。

126.“参考文献”『図説図書館のすべて』（改訂新版）図書館問題研究会編　ほるぷ出版　1985　P.266-276（㊫010；Z、田辺010；ズ）所収　166点。

127.“戦後における中井正一の図書館活動に関する文献目録”馬場俊明ほか『京都産業大学図書館年報』№.4　1985年　P.144-151（㊫P017；K5）所収

Ⅰ著作、Ⅱ関係文献に分け約150点を採録している。

128.“参考文献”『図書館発達史』佐藤政孝　みずうみ書房　1986　P.358-360（㊫010.2；S4、田辺010.2；サ）所収

欧米諸国と日本の関係文献を43点紹介している。

129.“参考文献”『図書館建築　施設と設備』（図書館シリーズ9）植松貞夫、木野修造、樹村房　1986　P.174-175（㊫012.3；U、田辺010.1；ト；9）所収

1971～1985の文献52点を著者の50音順にあげている。

130.“図書館の管理・運営の委託に関する文献目録”『「図書館業務の（管理・運営）委託」に関する実態調査報告書』日本図書館協会編刊　1986　P.47-61（㊫011；T2）所収

1976～1986年刊行の図書、雑誌論文を161点列挙。

131.“参考文献”『近代図書館の歩み』（至誠堂選書17）森耕一　至誠堂　1986　P.277-273（㊫010.2；M2、田辺010.2；モ）所収　53点。

132.“参考文献”『図書館・情報学のための調査研究法』（図書館・情報学シリーズ5）緑川信之ほか　勁草書房　P.189-195（㊫014.9；T7、田辺010.1；ト；5）所収

和洋60点の主なものに解説を加えている。

133.“県立図書館を深めるために――いま読んで活かしたい文献”瀬島健二郎『みんなの図書館』№.109　1986年6月　P.58-62（㊫P010.1；M2）所収32点。

134.“児童図書館員のための参考文献”『子どもの図書館の運営』（図書館員選書11）小河内芳子編　日本図書館協会　1986　P.261-264（㊫016.285；K4、田辺016.28；コ）所収　39点。

135.“参考文献”『図書館司書という仕事』（仕事シリーズ2）久保輝巳　ぺりかん社　1986　P.247-248（㊫013.1；K2、田辺013.1；ク）所収　26点。

136.““大正デモクラシーと図書館”に関する文献目録”是枝英子編『図書館があぶない』（みんなの図書館双書2）森崎震二ほか編著　教育史料出版会　1986　P.185-188（㊫011.1；T2、田辺010.21；ト）所収　14点。

137.“日本における女性図書館員文献目録”赤瀬美穂『現代の図書館』Vol.24 №.4　1986年12月　P.238-243（㊫P010.1；G、田辺所蔵）所収

1927～1986年の関係文献約100点を紹介している。

138.“主な参考文献（単行本）”『図書館の第三の時代――ニュー・ライブラリアンのために――』片桐薫リブロポート　1986　P.243-247（㊫010.2；K2、田辺010；カ）所収　81点。《終り》

実例を中心とした
資料のさがしかた—34—

新聞記事のさがし方については以前にとりあげました「実例を中心とした資料のさがし方－29－（びぶりおてかNo.39　1986.4.1）」に引きつづいて質問例を調査しながら資料の紹介をします。No.39で紹介した資料についても、その後発行が中止になったものや、又新しく受入れたものもあり、それらを含めて収録期間が一覧できるように、表Ⅱにまとめました。

同表には大部でナマの紙面がみられるもの、索引と抄録、索引集、少し意味あいは違いますが検索の手かがりにするために、索引のついた年表も挙げてあります。

〔質問例〕

戦後ヤミ物資の入手を拒んで餓死した判事があったそうだがその記事をみたい。（生活物資が統制下にあった時代に判事が、配給食料にのみ頼り、栄養失調で死亡した事件は当時社会的反響を呼んだ）

〔調査〕

年表をひくにあたっては適切なキー・ワードを考えなければなりません。この場合は名前がわからないから「近代日本総合年表　第２版」の索引で、ヤミ、餓死、判事、をひいてみました。それぞれ１つはありましたがこの事件を報ずるものではなく、次に栄養失調で検索してみますと、1947－10C（1947年10月社会欄）とあり、本文をみると10月11日、山口良忠判事、配給食料による生活を守り、栄養失調で死亡、問題となる。とでてきます。念のため索引を名前でひくと、山口良忠判事栄養失調死、として同様にでます。どうしてもキー・ワードで探せない場合は止むを得ず年表を追うことになりますがこの場合は政治欄でもあるようですが、社会的反響が大きかったことからまづ社会欄からみてゆくのが順序と考えられます。

何れにしても、この事件に関してはいつの何新聞に記事があるかということは示されていません。この記事を別の資料で直接検索できないものでしょうか。「朝日新聞にみる日本の歩み」では年月毎の目次を追わなければなりませんが、22年11月５日── ヤミを拒んだ山口判事の死── 、同６日── 山口判事餓死の反響── 、とあり、当日の新聞面が掲載されています。

その他のものをみてみると「史料明治百年」「昭和史事典　事件世相記録」は目次でも、上記いくつかのキー・ワードによる索引でも検索できません。「追補明治大正昭和世相史」は索引では検索できず、世相年表の22年10月11日に、同判事の死亡を報じ、本文は── 法を守り死の行進── として11月５日の記事の一部を転載しています。又「戦後世相史事典」の項目一覧表の－社会－を追ってゆくと── ヤミを拒否した山口判事── とあり、本文には22年11月５日の記事の一部を転載しています。又「朝日新聞 100年の記事にみる奇談珍談巷談」下の年毎目次では22年に── 判事がヤミ拒み死亡── とあり、本文は若干の省略はありますが同日の記事を転載しています。

一般的にアプローチのために年表を繰ることはオーソドックスな方法ではありますが、他の参考資料── 例えばテーマをしぼったもの── を使うことによって早く目的の記事に出合うこともできます。

当図書館に所蔵しているものの中から表Ⅰに挙げたものを参考にして下さい。

表Ⅰ

書　　名	請求記号	収録期間	備　　考
新聞資料明治話題事典	210.6 ；S2㊥	明１－昭12	索引あり
朝日新聞 100年の記事にみる 全10巻	210.6 ；A2-2	明12－昭54	巻数により収録期間が多少異る。索引がある巻もある。
新聞雑誌に現れた明治時代文化記録集成　前・後	210.6 ；I3-2	慶４－明45	索引あり
新聞記録集成明治大正昭和大事件史	210.6 ；I3㊥	慶４－昭20	索引あり
新聞が語る明治史　上・下（明治百年史叢書 253巻）	210.6 ；A3	明１－明45	
戦後世相史辞典	210.76；S5㊥	昭20－昭50	
日本百年の記録　上・下	㊧ 917－K16	慶４－昭16	索引あり
史料明治百年	210.6 ；A ㊥	嘉６－昭40	索引あり
昭和史事典　事件世相記録	210.7 ；S20 ㊥	大12－昭58	索引あり
追補明治大正昭和世相史	210.6 ；M12	明１－昭46	索引あり

㊥……参考図書室図書　　㊧……旧分類図書

表Ⅱ

		明治1	大正1	昭和1	昭和60
①日本初期新聞全集（編年複製版）全20巻（P071－N13）	①安政4　明治1				
②幕末明治新聞全集（P071；B2）	②文久3　明治5				
③新聞集成明治編年史　1－15巻（索引アリ）（210.6；S）㊥※	③文久2　明治45				
④明治ニュース事典　1－8巻（総索引）（210.6；M25）※	④明治1　明治45				
⑤新聞記事資料集成　全53巻（071；S）	⑤明治44　昭和20				
⑥新聞集録大正史　1－15巻（索引アリ）（210.68；S2）	⑥大正1　大正15				
⑦新聞集成大正編年史　44冊（210.69；S）※	⑦大正1　大正15				
⑧大正ニュース事典　1－7巻・総索引（210.69；T5）㊥	⑧大正1　現在大正9　続刊中				
⑨朝日新聞に見る日本の歩み（210.6；A2）㊥	⑨大正1　昭和47				
⑩新聞集成昭和史の証言　1－20巻（索引アリ）（210.7；S17）	⑩昭和1　昭和20				
⑪新聞集成昭和編年史（210.7；S）※	⑪昭和2（1－9月）.5－11.20（1－3月）.23.24. 続刊中				
⑫朝日新聞の重要紙面で見る□年（P071；A8）㊥	⑫昭和62＋				
⑬毎日ニュース事典（索引あり）（071；M）㊥※	⑬昭和47　昭和54				
⑭ニュース・イヤーブック（朝日）（索引あり）（P071；A5－2）㊥※	⑭昭和48　昭和50				
⑮読売ニュース総覧（071；Y）㊥※	⑮昭和55				
⑯朝日新聞記事総覧（P072；A6）（人名索引　P071；A6－2）㊥※	⑯大正8年7月　昭和46　続刊中				
⑰戦後国内重要ニュース索引　1－3巻（210.76；K6）㊥※	⑰昭和20年8月　昭和41年6月				
⑱会社産業ニュース索引（日経新聞）（P071；N－3）※	⑱昭和47　昭和60				
⑲朝日新聞縮刷版記事索引（P071；A5）㊥※	⑲昭和51＋				
⑳新聞社説索引集（索引あり）（027.5；S15）㊥※	⑳昭和55＋				
㉑年刊人物情報事典（281.03；N9）（昭58のみ人名総索引 281.03；N9－2）㊥※	㉑昭和55　昭和58				
㉒新聞雑誌記事カタログ（索引あり）（P070.1；S15）㊥※	㉒昭和56.57				
㉓新聞雑誌発言者カタログ（索引あり）（P070.1；S16）㊥※	㉓昭和56.57				
㉔改訂増補維新後大年表（索引あり）（210.6；I7）㊥	㉔弘化3　大正14				
㉕近代日本総合年表　第2版（索引あり）（210.6；I4－1A）㊥※	㉕嘉永6　昭和58				

㊥…参考図書室図書

※…「びぶりおてか」No.39号で紹介済の資料

〔資料紹介〕

表Ⅰより

「朝日新聞　100年の記事にみる」

各巻にはそれぞれ「恋愛と結婚」「探検と冒険」「東京百歳」「外国人の足跡」「奇談珍談巷談」上・下「スポーツ人物誌」「特ダネ名記事」「追悼録」上・下とタイトルが付いている。

「新聞雑誌に現れた明治時代文化記録集成」

前編・慶応４年── 明治20年

後編・明治21年── 明治45年

編年体で編集されているが、その月日だけは、各新聞を通じてでなく、新聞別になっている。各巻末にそれぞれの索引がある。

「新聞が語る明治史」

上巻・慶応４年── 明治25年,下巻・明治26年── 明治45年

明治各年につき、最も基本的、中核的な記事を抜粋して編集している。「新聞集成明治編年史」に比較すれば約20分の１くらいの縮約版とみることもできる。さらに、詳細な明治史年表であるといってもよい。なお同種の「新聞記事で綴る明治史」上・下（210.６；Ａ３－２）もある。

「史料　明治百年」

「朝日年鑑」1964年版の別冊「日本百年の歩み」を母体として、それに補正を施し、新資料を補って編集されている。構成は年表・史料・統計を軸とし、各年表のはじめにある年史には、大小の見出しがあり、事件は知っているが年号がわからないような場合には、この見出しが手かがりとなるだろう。年表の間の囲みには文化、スポーツ等のトピックスがおさめられている。図表30項目、統計表74項目、グラフ24項目が収録され充実している。巻末には460人の人名録が付されている。

「日本百年の記録」

上巻・慶応４年── 明治45年,下巻・大正１年── 昭和16年　上記期間内の重大事件記録である新聞号外・主要新聞記事を集大成し、これに解説を付したものである。

表Ⅱより

「日本初期新聞全集」

本全集は「ナガサキ・シッピング」「ジャパンヘラルド」など欧文新聞８紙、「官板バタビア新聞」「官板中外新報」などの江戸幕府蕃書調所発行の新聞４紙、翻訳筆写新聞「横浜貿易新聞」「日本新聞」など４紙、明治新政府発行の「太政官日誌」「東征日誌」など17紙と、ジョセフ彦の「海外新聞」をはじめとする邦字新聞34紙が主な収録紙で、編年体に収録されている。本全集が②「幕末明治新聞全集」と比べて画期的であると言われる点は、各地居留地において発行されていた欧字新聞をも収録したことである。つづいて近々第２期明治２年から７年分まで複製刊行される予定である。

「新聞記事資料集成」

本集成は、神戸大学経済経営研究所が神戸高等商業学校調査室として発足以来、切抜き収蔵した「新聞切抜文庫」のうち、明治44年から昭和20年（編によっては19年）にわたる期間の35万点について、同学独自の分類に現代的改訂を加えて、項目別、編年体で編集したものである。企業・経営編（１巻－９巻）、貿易編（10巻－25巻）、労働編（26巻－36巻）、社会編（37巻－47巻）、生活編（48巻－53巻）から成る。

「新聞集録大正史」

大正年間発行の全国の新聞から史料的価値の高い記事を抜粋し、年月日の順に編年体で整理したもの。この時代には夕刊の日付が翌日の日付になっているものもあるが、日付は新聞に記されたままとしてある。各巻末には、その年の新聞広告を採録、第15巻「大索引」は事項目別分類と、人名50音別分類の２部門がある。

以上、今回紹介した資料の他に,やや特殊で個別的なものとして次に広告・文芸に関する資料を挙げておきますから参考にしてください。

「新聞広告100年」上・下（675.６；Ａ３Ａ）

収録期間　明治12年── 昭和51年　朝日新聞広告で綴った日本現代史、ないしは広告世相史である。広告主索引がある。

「新聞に見る政治広告の歴史」（675.６；Ｙ）

戦前の20回の総選挙期間（明治23－昭和12年）（とくに投票前後各１カ月）を中心に政治広告の流れをたどる。

「読売新聞文芸欄細目」上・下（P071；Ｙ６）

「読売新聞」明治34年４月－大正15年末までの文芸関係作品・記事を採録したものである。下巻末に人名索引がある。

「朝日文芸欄」（夏目漱石編集）（近代文学研究資料叢書３）（904；Ｔ７）

「東京朝日新聞」明治42年11月25日－同44年10月12日迄の文芸欄を抜粋編集したもので巻末に執筆者索引がある。

「国民新聞国民文学欄」（近代文学研究資料叢書９）（904；K20）

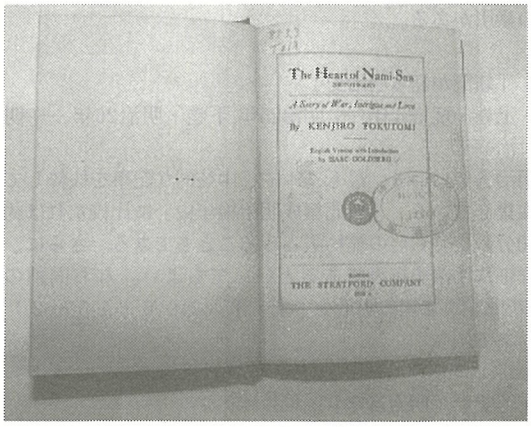
「国民新聞」明治41年10月１日－同45年７月25日迄の国民文学欄を抜粋編集したもので巻末に執筆者・欄名索引がある。

ピックアップ

徳冨兄弟とトルストイ訪問

日本人で生前のトルストイに会えたのは徳冨兄弟を除けば同志社総長であった原田助他数名にすぎなかった。賢兄愚弟と言われた徳冨兄弟はトルストイ訪問の仕方にも際立った特徴を示している。蘇峰は国民新聞社長として盛大な見送りをうけ、約一年にわたる欧米漫遊の一環として紹介状を携えて訪問した。この紹介状を書いたのは小西増太郎であった（野球解説者故小西得郎の父）。彼はモスクワ大学に学んだ俊秀で、老子の翻訳等を通じてトルストイとは昵懇であった。後に同志社でも教鞭をとったことを思い合せると奇縁という他はない。蘇峰37才、トルストイ68才の1896年（明24年）、10月８日から丸一日滞在し、歓談した。この模様は訪問の僅か５日後、オデッサで「トルストイ翁を訪ふ」に結実した。

他方、蘆花の訪問は彼の性格そのままに青天の霹靂のごとく始まって意外な結末となる。訪問は蘆花の発意というより別居を主張した妻愛子の薦めに従ったものである。とはいえ、訪問が行われた1906年１月中旬、蘆花はトルストイ宛の手紙と「不如帰」の英訳本、日本語のトルストイ伝を送っていた。これが唐突にも本だけが先にトルストイに届いた。不快を禁じえなかった彼はその後到着した手紙に対して英文で書く煩雑さも加わってか、４カ月も遅れて返事を書いた。この為、性急な蘆花はこれを見ることなく、見送りも拒んで一人巡礼の旅に立った。途中ポートサイドより訪問通知をしていたもののトルストイ側からすれば破天荒な訪問者であることに変りがなかった。写真によれば、汚れた袷に兵児帯姿、無精髭の東洋人といったところである。ロシア語を全く解せずモスクワから 200㎞も離れた田舎へ行くのは今日の目から見ても蛮勇としか形容しがたい訪問ぶりである。蘇峰の訪問から10年後、1906年（明39年）６月30日から７月４日までの５日間であった。蘆花は39才、トルストイは78才の時である。蘆花は出発の慰留を受け、加えて、旅行の最大目的であった訪問にもかかわらず、妻恋しさが募って突然滞在を打ち切ってしまった。後世人としては残念至極である。妻ソフィーとの決定的破局を迎えていたトルストイは蘆花宛の手紙の中で、この件に関して論じたい風に書いている。それは蘆花の妻の宗教観、人生観を質す形で表わされているがこの件に関する二人の問答は絶好の機会を逸してしまった。



上に掲げた「不如帰」の英訳本は上述の蘆花がトルストイに送ったものではないが、当館が所蔵する最も古い版である。注目すべきはこの序文の中で当時既に蘆花は「日本のトルストイ」と呼ばれていたことである。兄との関わり、妻との葛藤、求道的精神と肉欲の乖離等二人には似通った事情が横たわっていたことは事実だが、「日本のトルストイ」と言われる真の所以は別の所にあるに違いない。それは蘆花が賢い兄と違って、幸徳秋水の事件に際して時の総理大臣に建白書を書き、死刑の非を説き、天皇に翻意を促す上告の檄文「謀反論」を書いた熱血人道主義者たりえたことに負っていると思われる。

“びぶりおてか”　同志社大学図書館報　No.44　1988年10月１日　発行

発　行　同志社大学図書館　京都市上京区今出川通烏丸東入　電　話　251－3971

編集責任者　西　田　逸　郎（図書館庶務課長）